

## 書 評

G. J. Ashworth and J. E. Tunbridge :

“The Tourist-Historic City” (歴史的観光都市)

Belhaven Press 1990年

B 5 判 283ページ £29.5

わが国の京都市が「歴史的観光都市」宣言をおこない、キエフなど世界中のいわゆる古都であった都市とともに「歴史的観光都市」会議を開催した経緯は、我々の記憶に新しいところである。世界中の観光資源のなかで、風光明媚な自然景観をのぞけば、都市の歴史的建造物は観光対象としてもっとも大きな存在である。また古い歴史をもった都市からみて、観光産業はますます重要性をましてきている。このように「歴史的観光都市」という概念は、単なる政策上の課題以上に、社会科学的に大変興味深い内容を含んでいるが、これまで地理学研究の上で取り扱われることが少なかった。

その理由は、多面的性格を取り扱う上で、学際的アプローチを取らざるを得ない点にある。現在の歴史的資源が観光対象となっている現象を理解するためには、都市の「歴史地理学」に対する洞察が必要であり、同時に現在の観光行動に対する「観光地理学」的視点が不可欠である。また都市空間に焦点があることから「都市地理学」的アプローチも必要である。しかも「歴史的観光都市」とは、この3つの概念「歴史」「観光」「都市」からのアプローチを単に結合しただけでなく、結合することによってそれ以上の意味が発生し、独自の存在になっているのである。かくしてその地理学的内容は、豊穡ではあるが複雑なものとならざるを得ない。

このような背景のなかで、「歴史的観光都市の地理学」を正面から取り扱った本が刊行された。著者の一人アッシュワースは、英国のリーディング大学で地理学、ケンブリッジ大学で経済学を修め、1979年来オランダのフローニンゲン大学の都市・地域計画学科主任教授、国際空間政策研究校の校長を務めている。共著者タンブリッジは、ケンブリッジ大学、ブリストル大学、シェフィールド大学で地理学を学び、現在はカナダ・オタワのチャールストン大学地理学科の助教授である。このように本書は、地理学者の手になるこのテーマのアカデミックな研究としては画期的なものと思われる。以下、その内容をみ

てみたい。

第1章「序 (Introduction)」では、歴史的観光都市を解明するため、①形態論と機能論、②都市間比較論と都市内部構造論、③「観光のための歴史性」と「歴史性のための観光」、という3つの枠組みが提示され、つぎに考察対象となる歴史的観光都市の範囲を、ヨーロッパ、東地中海、北米、カリブ海、オーストラリア、南アフリカに限定する理由が示される。これについては、わが国の読者のなかには不満が残る向きもあろう。いうまでもなくアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国には、新大陸諸国よりはるかに歴史の古い、有名な観光都市が豊富に存在しているからである。したがって本書は、新たな分野を切り開いたパイオニアとしての成果は十分大きい。世界の歴史的観光都市の一部に触れているにすぎない。未開拓の領域は、まだ多く残されているといえよう。

前半部分である第2章から第5章では、歴史的観光都市の理論的解明に重点がおかれる。第2・3・4章では、形態論・立地論の立場から段階的に都市構造モデルを構築していく。

第2章「歴史的都市 (The historic city)」はもっとも長く、本書の基礎をなす部分である。まず、都市保存運動の歴史が紹介される。この点で注目されるのは、各国の運動がほぼ足並みを揃える形で同時期に進展してきた経緯である。16世紀ルネッサンス、18世紀啓蒙主義、19世紀ロマン主義のもとでアマチュア主体の保存運動が育ち、20世紀前半に至り各国で公的機関の介入と立法をみた。20世紀後半に入ると、単なる建築保存 (monument conservation) から地区保存 (area conservation) へ、さらに都市計画 (town planning) へと、そのスケールを拡大していくことが示される。

次に保存の動機と正当性について、美的価値 (aesthetic) と骨董的価値 (antique)、供給指向概念としての真正性 (authenticity) と需要指向概念としての遺産 (heritage) などの対概念の区別が強調される。正当性の根拠として、社会心理学的因子、政治的因子 (民族主義対国際主義、地方主義対中央主義、社会主義対資本主義など)、経済的因子などがあげられる。

以上の議論をへて歴史的都市の概念規定に至るが、これを3つの視点(①形態、②計画上の指定、③利用者からみた価値)からおこなっている。とくに②の重要性は軽視できない。歴史的都市を指定する行為だけでなく、指定によって歴史的都市が生まれるというプロセス、すなわち両者の相互関係から歴史的都市が形づくられていく指摘は重要であろう。ここで「近隣効果(neighbourhood effect)」がみられるという指摘は興味深い。

最後に歴史的都市の発展的モデルがつけられる。これは4段階からなる。第I期には、すべての機能を包摂した原都市(original city)が存在し、第II期に住宅機能だけが外部にむかって膨張する。第III期がもっとも重要で、一種の「CBD移動(CBD relocation/migration)」という興味深い現象によって歴史的都市の実質的な誕生が起こる段階である。まず原都市内の歴史的遺産に対する評価がなされ、なんらかの保存策がとられる。その後の経過は西ヨーロッパと北米で異なる。西ヨーロッパでは、保存策が商業活動への制約となり、商業活動が原都市から移動してCBDを構成し、残された部分が歴史的都市を作る。北米では、制約のある圧力は存在せず、需要の移動によって一種の「CBD内の放棄地区(zone of discard of a CBD)」が形づくられ、両者が分離する。いずれにしても、歴史的都市とCBDの空間的分離が起こるのである。第IV期には、この両者のオーバーラップした部分に一種の遷移地帯が形づくられる。

第3章「観光都市(The tourist city)」では、まず歴史的都市における観光に焦点があてられる。ここで重要なのは、歴史的都市と観光都市の経済的不整合の問題である。これは、観光産業にとっての資本と投入は歴史的都市に他ならないが、歴史的都市自身はその市場に間接的にしか関与できず、利潤を直接受け取る主体は観光産業であるという特殊事情をさす。

つぎに観光都市のモデル化がなされる。まず観光都市のいくつかの要素の立地が論じられるが、とくにホテルの立地が興味深い。これによれば、上級ホテルは上記のモデルにおけるCBD—歴史的都市のオーバーラップ地帯(=歴史的核にも近代的核にも近い理想的位置)か、都市辺縁部の幹線道路や空港ぞいの高アメニティ地域に立地し、中級以下はCBDの周囲に分散することがわかる。このような要素

を総合すると、観光都市(=観光機能の集積地区)は、観光施設や、料理業(catering)を指標として画定され、一部が歴史的都市に、一部がCBDにオーバーラップした領域にあたるということが結論づけられた。

第4章「歴史的観光都市のモデル化(Modelling the tourist-historic city)」では、第2・3章の結果を重ね合わせる。これは、スタンスフィールドらの余暇業務地区(RBD)や、パーテンショウらの中央観光地区(CTD)に近い。CBD移動によって、CBDと歴史的都市の領域がたがいに重なりつつ形成されたのち、この両者にそれぞれ重なりあって観光都市の領域ができる。狭義の歴史的観光都市は歴史的都市と観光都市の共通部分であり、広義には両者の集合和である。

ところで彼らのモデルは、もっとも典型的な<西ヨーロッパの多機能大都市>を念頭に構成された。そのため現実にはさまざまなヴァリエーションがある。

まず位置的变化型では、<ウォーターフロント型都市>や<アクロポリス型都市>がある。前者の代表はボストンで、CBD移動が抑制され、歴史的都市は近代的都市に埋め込まれて島状に点在するようになる。後者は地中海地方の小都市に典型的にみられる。防衛上、歴史的都市が小高い丘につくられ、近代的商業は離れて発展し、「山の手歴史的都市」と「下町現代都市」が完全に分離して存在する。大都市でもトルコのアンカラなどでは、歴史的都市の小高い丘が、都市内の島となって埋め込まれている。北欧でも類似の「ブルク現象」が認められる。

規模的变化型として、<小都市>では歴史的都市と観光都市が未分化の状態として存在し、逆に<大都市>では完全に分離し多核化の様相を呈する。

最後に文化的変化型には、5類型があげられている。まず<スペイン型都市>は、フォードにもとづき、①中世前期核、②レコンキスタ後の中世後期—近代拡大地区、③19世紀拡大地区、④20世紀拡大地区、の4つに地域区分された。①は市壁でかこまれた聖職者の町で、その市門につくられたマヨール広場(plaza mayor)は、それ自身歴史的遺産であると同時に、商業活動の中心として①と②を結節する位置にあった。すなわち、歴史的都市と近代都市の遷移地区にはメルクマールとしてのマヨール広場があることが最大の特徴となっている。<モロッコ型

都市>では、伝統的市街(メディナ)とヨーロッパの発展の結果生まれた新市街との間の社会経済的格差がひどく、前者の保存は危機的状況にある。<エルサレム型都市>では、宗教都市としての空間領域が大きいのが特徴である。16世紀オスマン朝時代につくられた市壁内の都市では古い市場が伝統的商業の機能を果たし、イギリスの委任統治時代以降、西部海岸都市への交通路にそって現代的CBDが成長するという特異なパターンに特徴がある。<日本型都市>では、城下町が取り上げられた。これは前近代の段階で、歴史的都市である武家町と、商業集積地である市町とがすでに分離し、オーバーラップゾーンがなかった点で、<アクロポリス型都市>に類似していることが指摘されている。最後に<北米型都市>では、観光機能がより広範囲に分散し、観光都市を明確に定義することが難しいとされた。

ところで歴史的観光都市は、都市として歴史的観光機能のみを備えているわけではない。第5章「歴史的観光都市の利用と利用者(Uses and users of the tourist-historic city)」では、歴史的観光機能が、都市のより広い文脈、すなわち他の機能にどのような影響をおよぼすのかを解明している。まず長所としてあげられるのは、高密度の歩行者通過交通量と高級な地域イメージの創出であり、短所は、区画や建築に対する制約が大きく小区画である点である。この結果、余暇買物(Leisur shopping)、工芸品(arts/crafts/antiques)、料理業(catering)など特徴的業種が集積し、「ひやかし率(inspection/purchase ratio)」の高い、衝動買い、比較買いなどの消費者行動に対応した立地をおこなう。最後に、歴史的都市の利用者を、住民/観光客の区別と関心の高低によって類型化した。

後半部、第6章から第9章では、歴史的観光都市の実証研究が中心である。

第6章「歴史的観光都市の計画・マネジメント・マーケティング(The planning, management, and marketing of the tourist-historic city)」では、歴史的観光都市の国際的な分類論がなされる。分類の基準として、①人口規模、②都市機能混合の多様性、③需要指向型-資源指向型の3つがあげられる。まず前2者のうち、①は大中小の3レベル、②は単機能、多機能の2レベルを考慮するので、すべての可能性を考慮すれば6つの類型が考えられる。

しかし実際には両者が関連しあっているので、実質的に意味があるのは<単機能の小都市><多機能の中都市><多機能の大都市>の3類型のみである。以下、第7・8・9章において、この3類型の事例分析がなされる。

第7章「単機能の歴史的観光都市のマネジメント(The management of mono functional tourist-historic city)」では<単機能の小都市>の例として、需要指向型のレゴランド、ディズニーワールド、カナダ村、資源指向型のリーベ、ウィリアムスバーグ、ハイデルベルク、ローヴェルなどについて事例研究をおこなった。

第8章「多機能の大都市における歴史的観光要素のマネジメント(The management of tourist-historic elements in large multifunctional cities)」では<多機能の大都市>として、需要指向型、資源指向型の別はなく、ロンドン、パリ、アムステルダム、ブラッセル、シドニー、ボストンなどがあげられ事例研究がおこなわれた。

第9章「多機能の中都市における歴史的観光要素のマネジメント(The management of tourist-historic elements in medium-sized multifunctional cities)」では<多機能の中都市>の例として、需要指向型のオタワ、フローニンゲン、資源指向型のピーテルマルツブルク、ノーウィッチ、ケベック、サバンナ、チャールストンなどについて事例研究をおこなった。この多機能中都市こそ、歴史的観光都市としてもっとも典型的とされている点は注目に値する。事実、前半部の理論的モデルもこの類型の都市を想定しており、筆者らの経験がもっとも豊富なフィールドである。

第10章「結語(Conclusions)」では、社会-政治問題、雇用、利益へのアクセス、経済問題、環境問題などの多方面からこれまでの結果を要約し、保存への結論、観光への結論、都市への結論という3つの次元からまとめがおこなわれ、脱工業化社会において「歴史的観光都市」の役割は高まると予言している。

以上、本書は新しいテーマに正面から取り組んだ意欲作であり、豊富な事例と理論的考察によって、歴史地理学・観光地理学・都市地理学のいずれの専門家にも興味深い内容を提供できるものと考える。

(小長谷一之)